

昔の思い出 ナムル鳥警備隊

千葉県 塚越 康弘

私の育った時代はいわゆる、我が国の軍国主義時代の真ただ中で、小学校五年生の時代でしたが、家から学校へ通う道路では、必ず軍人将校が、若い兵隊に手綱を持たせた馬にまたがり、馬上に胸を張って威儀を正しく、それほど広くもない道路を歩んで行きます。

そこを通る人たちは、その都度傍らに道を選けて、小さな子供たちは大人に手を引かれて道を空けたものです。当時の道路には、人力車や乗合自動車（バス）が走り、また荷物を積んだ貨物自動車（トラック）などが行き来していました。

そして、要所々々では交番の巡査が長いサーベルを腰にして睨んでいるという嫌な時代でした。

このころ父に買ってもらった自転車が二円六十

銭ほどでした。また当時の子供たちの遊びはこまやメンコで、四、五人集まるとごぎを敷いた上で車座になって遊んだものでした。

このようにして小学校を卒業しますと、商店などに奉公に出るなど早くも社会にでる者があり、さらに高等小学校に進む者、中学や商業学校に進学する者など、友人たちと別れてゆきます。

私は中学の受験に失敗して、小学校卒業のまま社会に出ることになりました。ちょうどこの年に妹が誕生したのですが、このとき父が病死して、その後、兄一人、弟四人の兄弟は母親一人に育てられることになり、私の苦勞の人生がスタートするのでした。

社会に出るときの記念にと、形の良い銀杏いちょうの盆栽を庭に植え残し、思い出をつくりました。その後、私の住所は変わりましたが、当時の庭に残した銀杏は大木となって、現在でもその地区の一つの目印となっているそうです。

私は、この町から徴兵検査で横須賀海兵団に入

団しました。この日は昭和十七年九月一日で「十六年徴兵」です。当時、海兵団は毎年入団が前期（四月）、後期（九月）に分かれていました。私は九月入団で後期の入団兵でした。

この横須賀海兵団での新兵教育を三カ月受け、十二月三十日に退団、直ちに翌昭和十八年一月一日に霞ヶ浦海軍航空隊に転勤、さらに翌二月には勝浦の海軍特設見張り所に転勤、ここでは「手旗信号」など信号訓練を叩き込まれ、四月には久里浜にあった横須賀海軍通信学校の電波科に入学し、三カ月の本格的な通信教育を受けました。

ここを卒業すると、いよいよ戦地に派遣となります。横須賀鎮守府で編成が行われ、私は通信の特技兵として第六十七警備隊に編入されました。

赴任地はギルバート諸島のナウル島ということでした。ナウル島は日本の第一線の防衛戦にあり、横須賀第二特別陸戦隊も駐屯していました。

赴任には、たまたま横須賀軍港に入港中の巡洋艦「五十鈴」に便乗して任地に向かいました。

任地では既に設営されていた電波探信機の勤務に就き、敵機や敵艦隊の発見作業に入りました。この電波探信機は今日で言うレーダー技術です。

（当時、反攻に入った米軍は、サイパンを拠点として、開発したB 29爆撃機による日本本土の空爆を計画していました。サイパンにこの空爆の基地を作るには、先ずサイパンの東南、すなわちサイパンの背後にあるマーシャル、ギルバート諸島に前進基地を建設することを考えていました。）

我々の任地のナウル島は、ギルバート諸島に位置し、大戦時に苦闘したマキン、タラワ、オーシヤンなど重要な諸島です。任地は赤道を横断してすぐのところですが、このため、ここへの航海中、赤道を越えるときに「赤道祭り」をするのですが、全員艦の甲板上に上がり、祝杯を挙げ、今でも良い思い出となっています。

参考までに申し述べますと、赤道の海の色は、全く変わって色が濃く、誰でもすぐ分かるほどです。そしてこの辺から突然降り出すにわか雨があ

ります。いわゆるスコールで風もかなり吹きます。飛び魚が艦の煙突などに当たって甲板に落ちる様を見ますと、やはり南方へ来たなとしみじみ思ったものです。

当時、私たちは、日本防衛の最前線基地にやってきたのだと思うと同時に、再び祖国に帰れるとは誰一人思いもよらぬことで、これからの戦争のことで頭はいっぱいでした。

記録によりますと、ナウルの前線基地に上陸したのは昭和十八年六月十八日でした。島の一部にはトロッコのレールが敷かれてありましたが、ほとんど破壊され、椰子の木もまばらにでしたが実を付けていました。先輩兵や老年の応召兵たちは、島民にこの椰子の実を取らせ、実の汁を飲んだりしていました。

島に上陸しますと、部隊の各役割分担やら小中隊に任務が振り分けられ、その編成にしたがって任務地点に引率され、それぞれ戦友たちと別れることになりました。

ナウル島は小さいといっても丘あり林ありで、小高い山の上の二箇所電波探信機を設営しており、調整中でした。早速私たちは、その作業の手伝いに入り、その結果、ほぼ完成することが出来ました。そして、これらの送信機を覆った網を隠す（カムフラージュ）ために大きなゴムの木の枝などを貼り付けたり、機械の下の台座も苦心してなるべく大木の近くに設けたり、当時では苦心して設営したものです。

（ギルバート諸島のタラワ、マキンは十余の環礁からなり、日本海軍数千人の陸戦隊、警備隊が分散、守備に就いていました。昭和十八年九月中旬、米軍はタラワ、マキン攻略作戦を「ガルバニック作戦」として準備を開始し、十月には偵察、十一月中旬には機動部隊による空襲、艦砲射撃などを加えてきました。

結果的に米軍はサイパンを攻略、ここに爆撃機基地を建設し、日本本土に対する本格的爆撃を開始したのですが、ナウルなどは飛び石となり、取

り残されたこととなります。そして取り残されたこれら島々は、その後は自給自足の耐乏生活を強いられたのです)

一方、私たちは、戦地ですからのんびりする暇などありません。ここは日本防衛あるいは敵の動向・情報をキャッチする最前線、最先端ですから、本部や司令部に直通電話で種々の情報を報告する義務があり、苦勞の連続でした。

しかし六時間の勤務が終わった非番時には、付近の開墾に汗を流し、カボチャの苗を植えたりしました。カボチャは三十日か四十日で大きな水カボチャが採れるわけですが、部隊の皆で研究してカボチャの改良をし日本のカボチャに近いものを作れるようになるまでには全員で苦勞しました。

この結果、この島を「南瓜島」とまで言っ、常食できるようにまでになりました。最初は一日五回食べ、そのうちに固いカボチャが食べられるようになりましたが、ついに米食は、敗戦で引き上げるまで一度も食べないという暮らしの連続で

した。

しかもこの島に上陸して以来、足掛け五年間は米の飯を食べずにいたわけです。終戦は昭和二十年九月まで知りませんでした。

戦争とは食料の戦いでもあったのです。惨憺たるものです。なんという日茶苦茶な戦いを、そしてまたその一員として私も参加していたのです。

そしてようやく引き揚げということになるのですが、今度は迎いの船がなかなか入港せず、長い月日を持たされたのです。

やつのこと船が入り、これもぼろ船の「熊野丸」でした。ブーゲンビル島に立ち寄り、ここからは「高雄丸」に便乗、洋上でトロキナ捕虜収容所の兵士を乗せ、大竹港に入港、昭和二十一年二月十四日肌寒い小雪の舞う浦賀に入港しました。

我々は半そで、半ズボン、ベルト・コンベアで作った草履を八番線の鉄線で作った鼻緒を突っかけての上陸でした。対する迎える兵は毛皮の外套を着用していました。比べてみて、実に哀れこの

上なしの格好で本当に惨めな姿でした。

俗に「乞食部隊」とも言われた部隊です。帰還兵のたまり場では、人を裸にDDTを頭からかぶらされ驚いたものです。

ここにいて三日目に、天皇陛下の謁見があるから、全員表に出るように上官から言われました。表に一緒に並び、玉顔をしみじみと拝みました。

三月十六日、軍人を解かれ「召集解除」全員の復員を命ぜられ、それぞれ自分の故郷に帰宅しました。私が帰宅した時の母親の驚いた顔と姿は生涯忘れられることはありません。

そして昭和二十一年三月より早速、高崎鉄道管理局車両課客貨物係に復職しました。そして昭和二十七年三月、依願退職し、兄の経営する玩具問屋高塚屋に勤務し、三年後の倒産まで頑張りました。

海軍占守島警備隊

石川県 町 長 富

私は大正十（一九二二）年十月十五日、鹿児島県大島郡与論村大字奈間に生まれました。家業は米作と砂糖きび栽培でした。

地元の小学校高等科を卒業すると大阪の海員養成所に入り、一年間教育を受け、卒業後に大阪商船に入社、昭和十七（一九四二）年七月まで外洋航海で世界を二周するなど、船員として勤務しました。

兵役は、志願して昭和十七年九月一日に佐世保海兵団（兵籍左志機三六七六四）に入団しましたが、海軍に入る前から商船の先輩が元海軍軍人であったことから事前に海軍のこと、軍隊生活のことなど、種々と教示を受けることができました。入団者の名前が張り出されたとき、名前の上に赤丸が印されており、それは入団前に船員であった